

行雲流水

No.53 令和3年6月3日発行

こだわらない心・とらわれない柔軟な心

校長 寒河江 正人

ずいぶん以前のこと、ある方からお聞きした「お話」です。

むかしむかし、**若い僧侶**と**年配の僧侶**が、**修行の旅**をしていました。

旅の途中、二人が**たいそう急な川**のほとりに辿り着いたところ、**一人の女性**が川を渡れず困ってしていました。

若い僧侶が「**修行中の身にある者は女性に触れてはならない**」という**戒律**があることで、どうすべきか悩んでおりましたところ、**年配の僧侶**は、何も言わず、そっと女性を背負い、川を渡し、向こう岸で降ろし、何事もなかったように、また歩き出しました。

若い僧侶は、その行動に驚き、戸惑い、じっと考えながらともに歩き続け、しばらくして**年配の僧侶**を次のように諷めました。

「**修行中、僧侶は女性に触れてはいけません。それなのに、女性を背負って運ぶなんて。あなたは戒めを破ったではありませんか。**」

すると**年配の僧侶**は、こう答えました。

「**私は、すでに女性を岸辺に降ろしてきたが、お前はまだ背負っているのではないのか？**」

若い僧侶のように、「**女性**」にとらわれる。「**戒律**」にとらわれる。

そのために「**適切な判断**」ができず、「**今、成すべきこと**」を成せなくなってしまう。

さらに、いつまでも「**もう過ぎたこと**」に固執しているようでは、「**今、成すべき目の前のこと**」に対応することはできません。

人間というものは、ともすれば、**何かにとらわれて、迷ったり、人間関係をこじらせたり**しがちなものです。

私自身のこれまでを顧みても、日々小さなことに憤ったり、他人のことを羨んでみたり。でも、そうした「**私心**」をもっていない人は、おそらくこの世には一人もいません。

大切なことは、そういう自分の「**愚かさ・醜さ**」をあるがままに、**否定せず認めてやり、それ以上、「もう過ぎたこと」には「こだわらない・とらわれない思考習慣」**を身につけて行動するということです。

私も、まだまだ「**修行**」が足りず、この**年配の僧侶**のような**判断・行動**には及びません。